The Trumpet-Major 再読

遠　藤　利　昌

（受付　2006 年 10 月 6 日）

序

これまで *The Trumpet-Major*（1880）[1] は，Hardy の書いたテキストの中では，マイナーなものとして重要視されることがなかった。そのような批判の中でも目を引くのが，この *The Trumpet-Major* に始まり，次作の *A Laodicean*（1881），そして *Two on a Tower*（1882）までの 3 つの小説を，*The Return of the Native*（1878）と，*The Mayor of Castetbridge*（1886）以降の小説，つまり，これまで Hardy の代表作と言われてきた小説の間に挟まった‘Recession’の時期のものであるとか[2]，‘Entertainment and Digressions’であるとし[3]，‘inferior work’[4] としてきたことだ。

この‘Recession’と呼ばれる時期に至るまで，Hardy は，*Far from the Madding Crowd* を典型として，男女の三角関係を物語の基本的な骨組みとして描きながら，勤勉で誠実な男性が意中の女性と結婚するまでの物語，しかも階級差を出世という手段で乗り越えて結婚するというパターンを採ることが多かった。もちろん，それはいかにもリベラル・ヒューマニズム的なリアリズム小説の作法，つまり，論理的に構築されていくべき物語と，その論理の帰結としての結末という，直線的な物語の展開を求めるリアリ

1）　Thomas Hardy, *The Trumpet-Major*（London: Macmillan, 1974）　以下，引用はすべてこの版からにより，本文中に括弧内に記す。

2）　Michael Millgate, *Thomas Hardy: His Career as a Novelist*（New York: Random House, 1971）, pp. 145–193.

3）　Irving Howe, *Thomas Hardy*（London: Weidenfeld and Nicolson, 1966）, pp. 32–45.

4）　Richard Carpenter, *Thomas Hardy*（London: Macmillan, 1976）, p. 57.

ズム小説の伝統に則ったものであった[5)]。だが，前作の *The Return of the Native* においても，Hardy が論理的な説明が可能な直線的な物語から逸脱したテキストを書いていたことは，拙論でも述べた通りである[6)]。

The Trumpet-Major でも，John Loveday という勤勉で誠実な青年が登場し，彼にも階級差のある Anne Garland という意中の女性がいた[7)]。しかし，*Far from the Madding Crowd* や *The Return of the Native* と決定的に違う点は，この二作が，Gabriel Oak や Diggory Venn といった，直線的物語の中心的人物とも言える男性が意中の女性と結婚することで結末をむかえていたのに対し，John の方は Anne と結婚するどころか，戦死してしまうことだ。つまり，*The Trumpet-Major* に至って，単純なハッピーエンディングに終止符が打たれているのである。一人の男性の出世物語という直線的な物語を描いた前期のテキストが，後期の悲劇的なテキストに至る前のこの‘Recession’と呼ばれる時期に，ハッピーエンディングに終止符が打たれるという形で明確な変化が示されたとするならば，普通ならば，この *The Trumpet-Major* というテキストには，単なる‘Entertainment’と言って娯楽小説として片付けてしまうことができない要素があるのではないかということになるのではないだろうか。しかし，これまで，このテキストの批評史はそうではなかった。そこで，本論では，そのような‘Entertainment’という言葉によって片付けられてきた部分にこそ，このテキストの本来的意味があるのではないかという視点に立って，*The Trumpet-Major* を単なる‘Recession’の時期のテキストではなく，前期から後期へと移っていく中間点にあるテキストとして，その可能性を探っていく。それは悲劇的な視野

5）　この点に関しては，Shires がペンギン版の‘Introduction’の中で端的に示してくれている。Linda M. Shires, ‘Introduction’ to *The Trumpet-Major* (London: Penguin Books, 1997), pp.xx–xxi.

6）　遠藤利昌，「*The Return of the Native* 論―リアリズム的伝統への挑戦としての悲劇の開花―」『広島修大論叢』第46巻第 2 号（2006), pp. 1–17.

7）　Taylor は John を Oak や Venn の ‘the spiritual successor’ としている。Richard H. Taylor, *The Neglected Hardy* (London: Macmillan, 1982), p. 89.

が深まったというような従来的な Hardy 観を踏襲するものではなく，マイナーと呼ばれてきたテキストを，そのような視点から再評価するというものでもない。つまり，それ以前のテキストにも見られた当時の直線的な出世物語という言説や階級イデオロギーに対する転覆的要素の表れ方を明らかにしていくことで，これまでマイナーというレッテルを貼られてきた *The Trumpet-Major* というテキストを「再読」していくことを意味するのだ。

I

それではまず，この物語のタイトルにもなっている主人公 John Loveday と，彼の意中の女性である Anne Garland の関係を整理していきながら，この二人の関係が階級差とそれを克服しての結婚という構図になっているという点で *Far from the Madding Crowd* を引き継ぐ物語であることを確認していくことから始めたいと思う。

John は，人格的には‘single-minded ingenuousness’（93）という言葉に端的に表れているように，善良そのものであり誠実な男性である。しかし，社会的立場という点では，粉屋の息子に生まれた彼は下層階級の人間として位置付けられる。John は，いつかは粉屋を継いで欲しいと願っていた父親の意向に反して11年ほど前に軍隊に入隊し，現在ではラッパ隊長（trumpet-major）にまでなっている。しかし，このラッパ隊長というのも，結局は下士官であり，高官と言える程のものでもない。

一方，この John の意中の女性である Anne の方はと言うと，父親が風景画家という専門職にあった人であるから，一応，いわゆるミドル・クラスに属する人間である。この父親亡き後，財産などに恵まれることはなかったものの，と言うよりも，財産に恵まれなかったからこそと言うべきかもしれないが，その階級意識は消えることなく，その態度には，易々とは近寄りがたい‘dignity’や‘firmness’（37）を保ち続けていた。

このような階級的なこだわりを持つ Anne に対して，John は好意を持ち

求婚にまで至るのだが，この二人の関係を端的に示しているのが，彼が求婚したときの，次の語り手の言葉であろう。

> Any woman who has ever tried will know without explanation what an unpalatable task it is to dismiss, even when she does not love him, a man who has all the natural and moral qualities she would desire, and only fails in the social. (114)

女性が結婚相手として選ぶべき男性に望む‘the natural and moral qualities’は全て兼ね備えているものの，‘the social (qualities)’に欠ける John は，Anne にとっては受け入れがたい男性であった。下層階級出身であり，現在も下士官という身分に甘んじている John と，ミドル・クラスという出自にこだわる Anne との間には，大きな壁が横たわっているのである。このように，この二人の関係には，階級差という障害が存在し，それを克服することが求められているという点で，*The Trumpet-Major* が *Far from the Madding Crowd* を引き継ぐ物語であると言えるが，他にもこの出世物語と同時進行している要素がある。

Far from the Madding Crowd では，Oak が意中の女性である Bathsheba Everdene と結婚するに至るまでには，彼の出世という直線的な物語が必要であった。だが，それに加えて重要だったのは，その出世に論理的整合性を与えている，努力家であり誠実でもあり，さらには影で忍耐強く Bathsheba を支え続ける Oak のことを，彼女が認めるようになるということであった。そして，そのような女性になることが，彼女自身の人格面での成長として捉えられていた。つまり，Bathsheba が‘coquettish’[8] で軽率な女性から，Oak を認めることのできる円熟した女性へと成長していくという，もうひとつの直線的物語が必要だったのだ[9]。

8）Thomas Hardy, *Far from the Madding Crowd* (London: Macmillan, 1979), p.173.

9）このような見方に対して，当然，フェミニズム批評は好意的ではない。例えば，Boumelha は‘The process by which she is made into a fitting wife for Oak ↗

Bathsheba と同様に，Anne もころころとその恋愛対象を替えたり，大嫌いな Festus Derriman でさえ弄ぶ素振りを見せたりするときがある。そのような彼女であるから，Bathsheba と同じように‘coquettish’であるといった形容詞を使って性格描写する批評家もしばしばである[10)]。このように，John と Anne の結婚を可能にするには，単に John が階級的に上昇し，Anne がその彼を受け入れることができるようになるだけではなく，*Far from the Madding Crowd* の Bathsheba と同様に，このような Anne の性格が矯正され，John にふさわしい女性へと変化することも重要な要素なのだ。

以上のように，*The Trumpet-Major* でも，*Far from the Madding Crowd* に見られるような，男性の出世と，それにともなう女性の変化というふたつの直線的な物語が描かれている。そのような物語が，当時の読者階級の大半を占めていた中産階級の嗜好に迎合するものであると同時に，強化する装置として機能していたことは言うまでもないだろう。さらには，この男性側の出世と，女性がその男性を認めるに至るまでの過程が，当時の読者を巻き込んだ主体形成の物語でもあったと言えよう。それは，先ほどの引用冒頭部分の‘Any woman’という一般化された言葉が，Anne の結婚相手の選択という個人的レベルの問題を，このテキストを生んだ当時の言説空間へと問題を広げていき，Anne に限らず，当時の読者をも巻き込んだ問題にしていることでも分かるだろう。このように，ヒロインの人格形成が，ひとりの男性の出世物語というもうひとつの主体形成の物語と並行して進み，テキスト中の両輪を形成しているのだ。読者論で言う「期待の地平」の先にあるのは，そのような二人の主体形成としての物語の完成であったと言えよう。

↘ involves not only growth, but also loss.’と言っている。Penny Boumelha, *Thomas Hardy: Sexual Ideology and Narrative Form*（Sussex: The Harvester Press, 1982）, p. 33.

10） Harvey Curtis Webster, *On a Darkling Plain*（Chicago: The University of Chicago Press, 1947）, p. 140.

このように *The Trumpet-Major* は，Anne と John の主体形成の物語としての側面を持つのであるが，繰り返しを恐れずに言えば，そのような主体形成の過程は，あくまで Anne はミドル・クラスに留まり，John がそれに見合った職階に就くという前提が崩れることはないということである。Anne は母親が階級的に下にある粉屋と結婚するという段階になると，‘an awful sense of her own responsibility’ を感じるようになる。そして，これからは ‘the land of romance’ を選んでしまった母親に代わって，自分が社会的な立場を考えて現実的に行動しなければいけないと思い始め，それまで拒み続けていた地主の Derriman との結婚を真剣に考えるようにさえなる（109）。こうして Anne は，もともと強い階級意識をもっていたところに，さらにその意識を強くしていく。このようにテキストの中で示される階級構造の中で，Anne は常にすでに存在する階級イデオロギーの呼びかけに忠実に応えていく。そして，この階級イデオロギーの中で主体として生きる John が Anne と結婚するには，彼が出世することが第一条件なのである。

II

ここまでくれば，後は John が出世をし，悪漢の Derriman ではなく John との結婚が可能になるのを待つだけなのだが，John は出世することもなければ，Anne と結婚することもなく，‘one of the bloody battle-fields of Spain’（330）で戦死してしまう。さらには，Anne の性格面での変化も，出版当初から ‘Anne is obviously unworthy of (John)’[11] と批評されたり，現代に至っても ‘The heroine, for all her ingenuous charms, seems insufficiently worth the winning.’[12] と評され，変化していると判断されること

11）Unsigned review of *The Trumpet-Major, Athenaeum*, 20 November 1880, in R. G. Cox, *Thomas Hardy: The Critical Heritage* (New York: Barnes & Noble, 1970), p. 73.

12）Taylor, p. 83.

はなかった。つまり，このような主体形成の物語としての *The Trumpet-Major* は完成に至ることはないのだ。それではなぜ，このテキストは出版当初から辛らつな批判に晒されることもなく，たいした作品ではないとみなされてきたのだろうか。

Millgate は *The Trumpet-Major* を，幾分，皮肉を交えて，‘a condensation of major elements in *Sense and Sensibility*’[13] と指摘しているが，確かに，このテキストには Austen の二番煎じ的なところがある。それは Anne が直面する問題が，現実かロマンスかというように単純な二者択一的問題に還元されてしまっていることや，彼女の滑稽とも言えるような規範的な階級意識の表れ方を指してのことだろう。そのような点が，このテキストを‘Entertainment’と片付け得る，差し障りのない物語としての受容史を作ってきたとも言えよう。このように，このテキストは明白に直線的物語に矛盾を来すような結論を導いている一方で，‘Entertainment’と呼ばれ得るような軽い印象を与える要素によって，不穏な部分を包摂したようになっている。しかし，このような‘Entertainment’的なところにこそ，転覆的要素は姿を現しているのだ。次の引用は，物語冒頭，Loveday 家に下宿する Garland 家の様子を描いたものである。

> (Anne) lived with her widowed mother in a portion of an ancient building formerly a manor-house, but now a mill, which, being too large for his own requirements, the miller had found it convenient to divide and appropriate in part to these highly respectable tenants. In this dwelling Mrs. Garland's and Anne's ears were soothed morning, noon, and night by the music of the mill, the wheels and cogs of which, being of wood, produced notes that might have borne in their minds a remote resemblance to the wooden tones of the stopped diapason in an organ. Occasionally, when the miller was bolting, there was added to these continuous sounds the cheerful clicking of the hopper, which did not deprive them of rest except when it was kept going all

13) Millgate, p. 149.

> night; and over and above all this they had the pleasure of knowing that there crept in through every crevice, door, and window of their dwelling, however tightly closed, a subtle mist of super-fine flour from the grinding-room, quite invisible, but making its presence known in the course of time by giving a pallid and ghostly look to the best furniture.（38）

Garland 家は，Loveday 家の間借り人として同じ屋根の下で暮らしている。しかし，Garland 家も Loveday 家も，一方は財産はなくとも自家の品位を保つため，もう一方は相手への敬意から，両家の間にある階級差を明確にしようとする。まさに，両家ともに階級イデオロギーの呼びかけに忠実に応じていると言えるのだが，その具体的な施策として設けられたのが，両家の間を厳格に分けるための物理的な壁であった。しかし，このような努力にもかかわらず，そんな壁など関係ないかのように，昼夜を問わず製粉機や粉屋の作業の音が両家に鳴り響き，そして‘super-fine flour’がどんなに狭い隙間であろうとも，そこをぬって壁を侵犯していく。このような描写は，ともすると‘respectable’な Garland 家の格式を守ろうとする両家の思惑を滑稽なものと片付け得るものとしている。しかし，それは，単なる滑稽な描写というにとどまらず，両家が守ろうとする階級の壁が虚構に過ぎないことをも暴露している。両家の間にある壁をどんなに密閉しようとも，‘super-fine flour’がそれをあざ笑うかのように忍び込んでいき，Garland 家の‘the best furniture’を白く覆い，両家の間にあるはずの格差を均一化してしまうのだ。このように，*The Trumpet-Major* では，粉屋から出る白い粉が両家の壁を滑稽なものに見せているだけでなく，メタファーとして，その虚構性を暴き出すものとして機能もしているのだ。

‘The Two Households United’という章において，この物理的な壁を何のためらいもなく破壊してしまうのが，物語最後で Anne と結婚する John の弟の Robert Loveday であったことは示唆的である。Robert は女性を選ぶとき，‘a style of beauty’（140）の方を優先してしまう男性である。その

ため，婚約者の Matilda Johnson との破局の痛手を，Anne へと対象を移すことであっさりと立ち直ってしまうことができる。さらには，父親と Anne の母親の結婚を知ると，躊躇することなくのこぎりで壁を取り壊してしまう。Robert は，階級イデオロギー内の撹乱要素として描かれている部分があるが，そのような彼がのこぎりで壁を崩してしまう描写は，まさに戯画的とも言えよう。だが，Anne をその壊してできた穴から粉屋の水車の中へと連れて行き，彼女を‘a dense cloud of flour’（185）で真っ白に染めてしまったとき，彼はその粉を払う Anne の姿を見ながら，彼女が自分よりも上位にあると思っていたとしても，‘now they were almost equal’（185）と，両家の間にある壁がイデオロギーの再生産に寄与しているに過ぎないものであることを見抜いてしまうのである。

このような両家の壁の虚構性は，Anne にすら変化を起していくことになる。

> Those who have lived in remote places where there is what is called no society will comprehend *the gradual leveling of distinction* that went on, in this case at some sacrifice of gentility on the part of one household. The widow was sometimes sorry to find with what readiness Anne caught up some dialect-word or accent from the miller and his friends…（Italics mine, 38）

言葉というものが，社会的な差を明確にしていく上で大きな役割を果たしてきたこと，そして，時に，それが恣意的に利用されてきたことについては，あらためて言う必要はないだろう。しかし，イデオロギー装置としての‘society’のようなものがない場所では，いくら両家の間に，厳格に社会的な差をつけようとしても，言葉はその壁を安々と越えていき，階級意識の強い Anne ですら，その差を維持できずに‘the gradual leveling of distinction’を引き起こしてしまう。あの白い粉のように，両家の階級的な差の虚構性を曝け出し，均一化してしまうのである。‘remote places’という表現が，このテキストを牧歌的と呼びうるような片田舎の出来事として，

のどかさを与えていたとしても，その下に存在する社会的な格差と，その虚構性が顕在化される瞬間でもあるのだ。

Ⅲ

この物語が大きく動くことになるのは，John の弟の Robert が登場してから，特に，Robert が Matilda を婚約者として Overcombe に連れて帰ってからでる。この辺りから，これまで John と彼の意中の女性の Anne との関係を中心として物語が展開してきたのが，Robert と Anne が結婚するまでの物語へと移っていく。二人の結婚は，Robert が出世し，Anne が Festus 老人から財産を相続するというように，Oak と Bathsheba と似たような形で結ばれることになり，言うなれば，Robert が John の代わりに出世物語を実現してしまうことになる。だが，そこで問題になってくるのは，Robert と Anne の結婚の正当性である。目の前に現れた女性に簡単に心移りしてしまう‘the truant village lad’（188）である Robert に対して，当然，Anne が（そして，読者も）抱く‘*bad opinion*’（189）を彼が克服して，結婚相手として相応しい男性になること，そして，Anne 自身も移り気なところを克服する必要があろう。さらに言えば，John が，弟に Anne を譲るようにして戦地に赴き，戦死するという結末が，どれだけ意味のあるもとなるのかは，二人に懸かっている。Anne と Robert がそれぞれ変化をして結婚し，兄弟愛に満ちた John の戦死を，いかに英雄物語として成立させ得るかが，一度，John と Anne の結婚不成立によって裏切られた読者の新たな「期待の地平」の先にあるものと言えよう。

だが，この物語の中で，Robert が変化しているとは言えないし，すでに述べた通り，Anne が変わることもない。つまり，John の英雄物語も，Robert と Anne のハッピーエンディングも矛盾を来した形で成立しているのだ。このように全て中途半端に終わっていること自体が，この物語における転覆的要素と言えるのだが，ここで注目したいのは，このような矛盾の中で John が果たす役割である。Morgan の指摘するとおり，Oak や

Venn は，Bathsheba や Eustacia に対して‘moral watch dog’としての役割を果たし，彼女たちの行動を逐一，監視・修正しようとし，テキスト内の道徳的な支柱としての役割を果たしていた[14)]。それと同じように，二人の結婚を成立させようと奔走する John も，‘moral watch dog’と同様の役割を果たしているのだ。

例えば，この‘moral watch dog’としての John の役割は，Robert が Matilda を連れて帰ってきたときに発揮されることになる。Matilda は，Robert がたまたま Southampton で出会った，Salisbury にお金持ちのオバがいる‘a real refined woman’(165) として登場する。もちろん，これは全て Matilda がつくり上げた虚構であり，Robert や Loveday 氏といった人物たちが，その虚構に振り回される姿は，まさに‘Entertainment’そのものと言える。しかし，虚構を演じる Matilda と，それを信じ込んでいる人々によって繰り広げられるドタバタ劇の中で明らかにされるのは，階級というものが虚飾によって維持され得るものであるということである。このように，Matilda は階級イデオロギーに対する撹乱分子として物語内に登場し，その虚飾によって，階級のイデオロギー性を明らかにしていくのである。

しかし，このような Matilda のつくり上げた虚構は，彼女の素性が連隊の兵士たちと良からぬ関係にあったことを知っている John によって，あっさりと見抜かれてしまう。Robert の結婚相手が Matilda であるということを知ると，John はすぐに彼女を村から追い出そうとする。まさに，‘moral watch dog’としての John の物語内での役割が遂行されている瞬間と言えよう。Overcombe の村から去っていくように，John は Matilda に警告するが，彼はそれが弟のためであり，‘this is all the good I have done!’(168) と，最善の策であったと信じて疑うことはない。だが，問題なのはここからである。兄にとっての当然の行為は，弟の Robert にとってもそうだと

14) Rosemarie Morgan, *Women and Sexuality in the Novels of Thomas Hardy* (London: Routledge, 1986), pp. 30–83.

は限らなかった。‘(John) had no right to overhaul my affairs like this.’(167) という言葉からも分かるとおり，Robert にとって，John のとった策は余計なお世話であった。だから，彼はすぐに Matilda の後を追っていってしまう。撹乱分子としての Robert は，イデオロギーの内部から，その包摂された矛盾を暴露することになる。彼は追いかけながら，兄の助言が ‘the reasonable and good sense of his advice’(172) であると思いながら，それでも Matilda のことを思うとどうしようもなく，両者の間で揺れ動くことになる。そして，この揺れをどう解決してよいか分からない彼は，コインを投げてどちらにするか決めることにする。つまり，彼は「偶然 (accident)」(172) に任せてしまうことで解決を図ろうとするのだ。そして皮肉なことに，‘moral watch dog’ としての John の目標は，このコインのおかげで達成されることになる。John を構成しているイデオロギー内の問いかけなど関係なく，偶然に任せて，しかも，結果的に John の意図に適う選択をとる Robert の行動は，まさに，John のつくり上げようとする直線的物語に揺らぎをもたらし，階級イデオロギー内の矛盾を暴きだしているのだ。

もちろん，Robert のとった手段とその結果は，偶然の産物であって，結婚の宴の準備ができている段階で，花嫁が逃げていなくなってしまったことは，社会的に見れば ‘complete overthrow’(171) をもたらす一大事である。そこで思いつかれたのが，Mr. Loveday と Mrs. Garland の結婚による代理結婚式で，その場をしのぐことであった。それは粉屋が ‘All the morning I felt more ashamed than I cared to own at the thought of how the neighbours, great and small, would laugh at what they would call your folly, when they knew what had happened ’(173) と，近所の笑い者になることを恐れ，夫人と相談した結果であった。このように体裁を一時しのぎによって守ろうとすること自体が，‘Entertainment’ そのものと言えるのだが，それは守られるものの虚構性を暴きだすものでもあることは言うまでもない。Matilda が引き起こした撹乱が，結果的に，虚構に虚構を重ねることを

助長し，現実とされるものの内部から，それを蝕んでいく。Matilda の貴婦人としての演技，そして，それに引きずられるように起こる Loveday 家の演技が示すのは，このテキストが演技という設定を利用して，現実とされるものを侵犯していく姿なのである。

この演技という設定と，物語の道徳的な支柱としての John の役割との関係が交錯することになるのが，村を追い出された Matilda が実際に舞台の上で演技する女優として再登場する場面である。Anne を Robert に譲ろうとしている John は，自分がまだ Anne に想いを寄せていることを隠すために，劇場の女優に恋をしていると偽り，Robert と Anne を劇場に招待して，特等席でその女優と対面させることにする。もちろん，この時には，John は Matilda がその劇場で女優をしていることなど知るわけもなく，ただただ Robert への兄弟愛と，Anne への想いから思いついた行動であった。John は，Anne と Robert の二人の恋という物語を成立させようと，この舞台を用意したのだが，Matilda の登場によって，Robert と Anne が John の恋人は Matilda だと勘違いすることになり，彼の計画は大きく歪められることになる。だが，この歪みに対して，John は‘Gad, I won't explain; it shall go as it is! … Let them think her mine. Better that than the truth, after all.’（246）と，何もせずに成り行きに任せることにする。この後は，John の計画が失敗したことから生じた成り行き任せの偶然を原動力としてプロットが推し進められるだけである。Matilda は，Anne と Robert が劇場の一番目立つ席に座っていたのを，自分に対する挑戦だと思い込み，水兵強制募兵隊に Robert の居所を教えて復讐しようとする。Robert はそれを間一髪避けたものの，自らヴィクトリー号の Captain Hardy に直訴して，軍艦に乗り組むことになる。その結果，彼はトラファルガーの海戦で功績を挙げ，大尉へと昇進し，Anne との結婚の前提である出世を成し遂げる。ついでと言ってはなんであるが，この誤解は，John が Matilda に恋していると Festus に思いこませるという，更なる誤解を生み，John への復讐心から，Matilda と結婚してしまうというおまけ付きである。このように，

兄弟愛と Anne への想いという John の模範的とも言える利他的行動は，結果的には上手くいったものの，結局は偶然任せの結果であった。John が自ら用意した舞台は，彼が演出家として支配する立場から，偶然という不確定要素が排除し難く混ざり込んでくることによって，彼自身も舞台の上の役者へと引きずり込まれていく。その結果生まれるのは，偶然という名の演出家によって支配された世界であり，John の直線的物語をつくり上げようとした計画は，見事に頓挫してしまうのだ。彼は虚構の世界（Matilda）を追い出そうとし，直線的物語を復活させようとした。しかし，その虚構は彼のもとに否応なく戻ってきてしまい，さらには，彼のつくり上げようとした物語の虚構性を暴露してしまうのだった。

結　　論

これまでの *The Trumpet-Major* の批評史は，このテキストを単なる‘Entertainment’として，たいした作品ではないと片付けてきた。しかし，この‘Entertainment’的な要素がなければ，このテキストはあからさまと言えるほどの階級イデオロギーに対する批判に満ちていた。だが，本論で示したように，これまで‘Entertainment’として片付けられてきた点にも，このテキストの可能性，つまり転覆的要素が含まれているのだ。

The Trumpet-Major を皮切りに，続く二つのテキストが，これまで‘Recession’の時期の作品であると呼ばれてきたことも，このような *The Trumpet-Major* の持つ意味を考え合わせるならば，「再読」の必要があることは言うまでもないだろう。実際，Widdowson の *A Laodicean* 論を始めとして，近年，マイナーとみなされてきたテキストの再評価は盛んに行われている。このような批評傾向の中で，本論では，特にこのテキスト以前に執筆された *The Return of the Native* に至るまでの出世物語を基盤として構成されてきたテキストとの対比の中で検証してきた。そして，それまでのテキストの中にも潜伏していた転覆的要素が，この *The Trumpet-Major* に至って，単純なハッピーエンディングの否定など，さらに顕在化してきた

こと，そしてそれが‘Entertainment’的な要素によって包摂されていたことを明らかにした。その中で，後期の悲劇的なテキストへと繋がる鍵を示してきたつもりである。もちろん，ここで言う「悲劇」とは，従来的な Hardy 作品の批評で用いられてきたような意味ではなく，階級イデオロギーに対するテキストの姿勢を示すものであり，そういった意味において，後期の Hardy のテキストの「再読」の意味も出てくることになるのである。

Summary

Re-reading *The Trumpet-Major*

Toshiaki Endou

Until recently *The Trumpet-Major* has attracted little attention. It was often called one of the minor works Hardy wrote, and such a critic as Irving Howe regards the text as an 'Entertainment'. Michael Millgate holds that *The Trumpet-Major* and the following two texts, that is, *Two on a Tower* and *A Laodicean*, are the works in 'Recession' between *The Return of the Native* and *The Mayor of Casterbridge*, which have been considered as the major works of Hardy. Howe, who calls the three works as 'Digressions', seems to agree with Millgate in this point.

Before *The Trumpet-Major*, Hardy's texts basically focused on a lower class hero, who has fallen in love with an upper class woman. He cannot marry her because of his indigence for all his goodness of character, so he works his way up in the world and makes the marriage with her possible. These texts, of course, follow the liberal-humanists realist conventions and depict a linear story in which the plots are logically constructed and in most cases the texts end with a happy ending.

There appears a diligent and sincere young man, John Loveday, in *The Trumpet-Major*, and he loves a woman of some social standing and is declined for his low position like Gabriel Oak in *Far from the Madding Crowd* and Diggory Venn in *The Return of the Native*. However, the most eminent difference from Oak and Venn is that John cannot accomplish the linear success story, and far from it he dies in 'one of the bloody battle-

fields of Spain'. In short, Hardy put an end to a happy ending he had shown in the previous texts. With all these facts, the text has been relegated to one of the minor works of Hardy and called the work in 'Recession' or an 'Entertainment'. In this paper, I tried to show that parts which can be regarded as an 'Entertainment' contain subversive elements and re-read *The Trumpet-Major.*